

277. 田川流域の二つの古墳 —丸山古墳と北山古墳—

湖北の独立山塊上には多くの古墳群がある。しかしほとんどは未調査であるため、不明な点が多い。ここでは田川流域の古墳の中で、発掘調査されて内部が明らかになった丸山古墳と北山古墳について記す。丸山古墳からは舶載鏡などの遺物が出土しているが、墳丘や主体部の様子は明らかでないため、この場を借りて当時の記録写真や調査成果などを紹介したい。

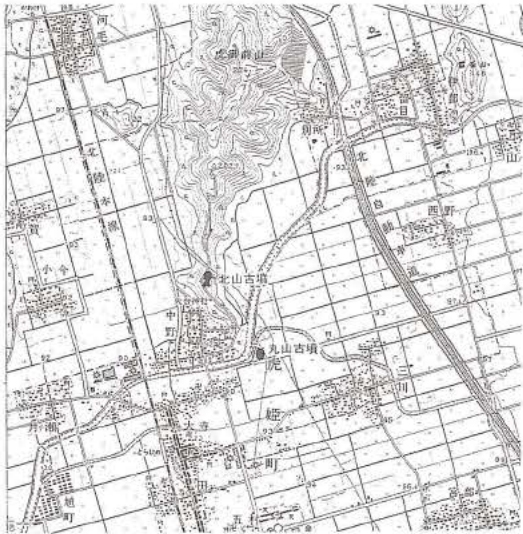


図1 田川流域の遺跡

位置と環境

田川は湖北町の山田山を水源とする河川で、浅井町・湖北町・虎姫町を貫流し、田川カルバートを経て高時川の下を潜ってびわ町を通り、琵琶湖に通じている。高時川を潜ってからの川の路線は後に造られた人工的な新川である。田川新川ができるまで田川は高時川に合流する路線を取っていた。しかしこの田川は合流する高時川よりも低いところを流れていたため、降雨量が著しく多いときなどは高時川の水が田川に逆流し、姉川・田川・高時川の3川の合流地点となる虎姫町は多くの水害に見舞われた。同町内の伝説にも田川の氾濫に関する災害が多く伝えられている。特に竜や大蛇の伝説が多く、かつての田川は現在とは違ってか

なり蛇行していたことが窺われる。しかし田川は災害をもたらすだけの河川ではなく、かつては水運にも利用されていたようで、中世には同町内の三川などに港があったことが伝えられている。北山古墳は田川右岸に位置する虎御前山の南端部の尾根上に立地し、丸山古墳は同じく田川左岸に位置していた丸山と呼ばれる独立丘上にあった。

周辺の遺跡

田川流域ではあまり発掘調査は行われておらず、考古資料はかなり少ないが、少なくとも弥生時代中期あたりから人々が暮らしていたことが確認できる。虎姫町中野に所在する中野遺跡では弥生時代中期の土器が出土しており、同町内五村に所在する五村遺跡でも弥生時代中期後半の方形周溝墓がは場整備に伴う発掘調査で確認されている。また近年の虎姫小学校専用プールの建設に伴う発掘調査や、いきがいセンター建設に伴う発掘調査などでも円形周溝墓や掘立柱建物が確認され、当遺跡が弥生時代中期後半から古墳時代前期初頭に営まれた集落跡であることが判明している。

丸山古墳

昭和53年に墓地公園造成工事に丸山を掘削する際に発見されたもので、発見されたときには既に大半が破壊されていたため、主体部構造・墳丘形態などは不明な点が多い。主体部は発表では割竹形木棺を粘土層で包皮したもので、木棺には赤色顔料が塗布されていたとされるが、当時撮影された記録写真(写真1)を見ても、はっきりとは分からない。墳丘に関しては、写真2を見てみると、工事によって丸山はかなり破壊されており、原形は留めていない。しかし単純に考えると「丸山」という呼称から、円墳ということも考えられるかもしれない。或いは円錐型の独立丘をそのまま墳丘に利用した、人工的な墳丘をもたないものかもしれない。しかし写真で見える限り土中に直径50~70cm以上はありそうな岩が多く見られることから、丸山全体が人工的な墳丘であったとは考えにくい。

丸山古墳からは鉄銚先1点・銅鏃1点・鉄器片数点・多量の古式土師器、そして舶載鏡が出土している。出土した土器は弥生時代末から古墳時代初頭のものとしてされている。舶載鏡は唐草文縁細線式獣帯鏡といわれるもので、鏡背面の文様帯の外区に唐草文をめぐらし、内区に鈕を中心に神獣を数匹配置するタイプの鏡であ



写真1 丸山古墳主体部遺存状況

る。写真3の出土状況写真を見る限り、鏡面を下にして出土したようであるが、造成工事の途中の発見であったため、出土位置は元位置とは異なっていた可能性がある。また、棺内・棺外どちらに埋納されていたのかも分からない。鏡自体もかなり破壊されており、全ての破片は揃っていないようである。特に内区部分の破損は著しく、神獣の配置や乳の数も分からない。この獣帯鏡で目を引くところは、外区の唐草文が著しく摩滅していること



写真2 丸山古墳遠景

である。発表によると、これは使用によって摩滅したものとされ、学会で論争となっていた伝世鏡の存在を示すものとされた。しかし一方では鑄造時に不具合が生じる「湯冷え」の現象によるもので、伝世によるものではないという見解もあったようである。

以上のことから丸山古墳は古墳時代初頭という年代が与えられ、滋賀県最古の古墳とされた。出土した獣帯鏡も、1世紀の前半から2世紀初頭に湖北地域にもたらされ、約170年間伝世されたと考えられるに至ったのである。ただ、年代を知る上で物的証拠に欠け、上記に記した内容も滋賀県埋蔵文化財センター蔵の記録写真からの検証にすぎない。緊急発掘調査であったことも含め、詳細は不明な点が多い。



写真3 丸山古墳獣帯鏡出土状況



写真4 復元された丸山古墳

北山古墳

北山古墳は平成8年度に虎御前山教育キャンプ場整備事業関連の調査の際に確認された前方後円墳である。主体部は後円部で確認され、全長5.6m・幅0.85mの割竹形木棺が直葬状態で検出された。北山古墳が立地する虎御前山は織田軍の小谷山攻略の際に、周辺の雲雀山や飯喰山などの独立山塊と同じく、砦として使用されていたため、墳丘はかなり改変されているようである。

棺内には丸山古墳と同じく、赤色顔料が塗布されていた。副葬品としては、鉄短甲・鉄剣・鉄刀子、そして丸山古墳と同じく船載鏡が、それぞれ1点ずつ棺内から出土している。主体部の遺存状態は良好で、遺物の出土位置はほぼ元位置を保っているものと思われる。

これらの副葬品の中で注目されるのは船載鏡と短甲

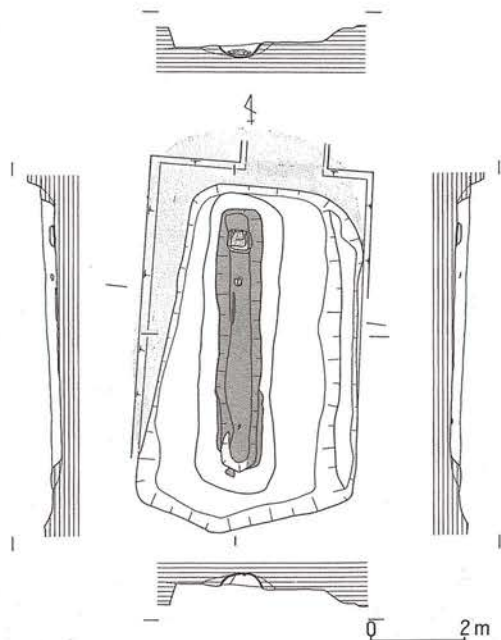


図2 北山古墳主体部遺物出土状況

である。船載鏡は鏡背面の外区に唐草文をめぐらし、内区に鈕を中心に神獣を配置している。この文様の組み合わせは、丸山古墳から出土した唐草文縁獣帯鏡と同形といえるものである^①。しかし両者の寸法は少し異なり、丸山古墳のものは直径11.5cm、北山古墳のものは直径13.6cmと北山古墳の鏡の方がやや大きい。遺存状態も北山古墳の方が良く、鈕の付近に若干の摩滅がみられるものの、外区・内区とも文様が良好に遺存する。北山古墳の鏡は、出土状況からみて棺内の被葬者の胸のあたりに置かれたと考えられる。

短甲は鉄製の横剗板鋸留短甲であるが、地板や帯板の組み合わせ方などは、河内の巨大古墳群から出土す

る、所謂定型化された量産品の短甲とは明らかに異なるものである^②。

これらの出土遺物などから、北山古墳は5世紀代という年代が与えられている。

北山古墳が立地する虎御前山には四郷崎古墳をはじめ、その他多数の古墳がみられ、山の頂上あたりには織田信長陣地跡と伝えられる前方後円墳がある。この前方後円墳は前方部が撥形に開く墳丘をもち、現在の遺存状況だけで判断すると、墳形は古式の様相を呈している。

一方、北山古墳の北方約200mのところでは、6世紀代の土器をもつ埋没古墳らしき遺構が同キャンプ場整備に伴う調査で確認されている。また北山古墳の南方にある矢合神社の境内には、一本松古墳といわれる円墳があり、境内の東側を通過して虎御前山教育キャンプ場に至る舗装道路の工事の際に、須恵器の甕が出土している(写真5^③)。このように周辺にはかつては多くの古墳が存在していたようであり、北山古墳は山中に単独で造られた古墳ではなく、複数の古墳から形成される古墳群中の1基と考えられる。

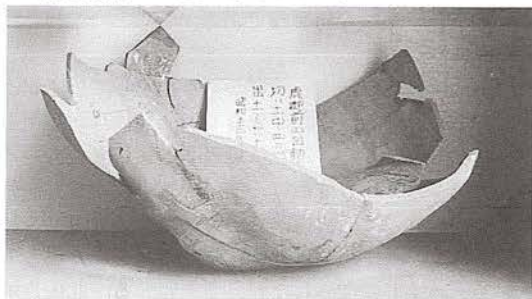


写真5 矢合神社東側道路工事中に出土した須恵器

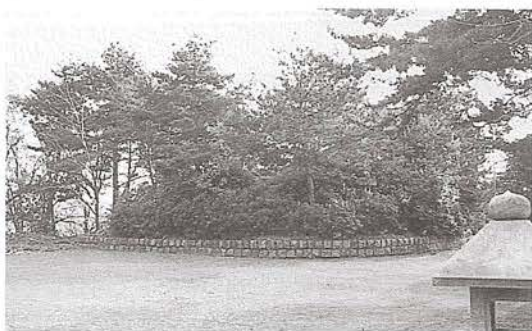


写真6 矢合神社境内の一本松古墳

丸山古墳と北山古墳

田川流域に出現する丸山古墳と北山古墳(虎御前山の古墳群)とを比べると、いくつかの疑問が生じてくる。

・鏡について

丸山・北山の両古墳は共に同形の船載鏡を持つ人物の墓であるが、想定される年代には約100年から200年



写真7 (左：丸山古墳 右：北山古墳)
二つの舟載鏡

程の差がある。仮に共にほぼ同時期に持ち込まれ、伝世された鏡とすれば、伝世期間は北山古墳の方が長いということになるが、それに関わらず、使用することによって生じる摩滅の度合いは丸山古墳のものの方がはるかに大きい。虎御前山の周辺の独立山塊上に展開する雲雀山古墳群や涌出山古墳群からも鏡は出土しているが、いずれも仿製鏡である。

・短甲について

短甲は湖北町雲雀山古墳群からも出土しているが、北山古墳のものとは形式が異なり、三角板兵留短甲といわれるものである。外見は量産品の短甲と似ているが、使用されている鉄板は不揃いのものばかりで、帯板との合わせ方で三角板革綴短甲に似せているように感じられる。量産品とは違う、試行錯誤を繰り返してハンド・メイドで作られた製品を思わせる。北山古墳のものも、量産品の技法を真似ながらも量産品とは異なる製品に感じられる。

その他様々な疑問点が挙げられるが、これらのことは丸山・北山両古墳の副葬品がもつ特殊性から生じていることであり、これらを独自の地域性と考えるか否かによって、当地域の理解の仕方が変わってくるだろう。仮に中央政権下にありながらも強い在地色を示しているとしても、貴重な舟載鏡や中央工房で製作されて配布されるはずの短甲を独自のかたちで所有しているということは、当地域独自のルートを持っていたからこそ可能だったのではないだろうか。中央に目を向けるばかりでなく、今一度地域の重要性を見直し、地域の社会体制と中央との関係などを考えていかなければならないのではないだろうか。

以上、虎姫町内で確認された2基の古墳と周辺の資料を紹介した。ここで紹介したふたつの古墳以外にも、東浅井郡域の独立山塊上には多数の古墳が存在し、北山古墳並の規模の前方後円墳も何基か確認できる。ま

た、平野部においても弥生時代以降の土器が多く採集されている。田川流域の遺跡は未調査ながらも、多くの貴重な考古資料が埋蔵されていると思われ、丸山・北山古墳のような特殊な遺物が将来発見されるもの近いかもしれない。(重田 勉)

註

- ①北山古墳出土の細線式獣帯鏡の内区の神獣のモチーフは、一般的にみられる浅い線刻で描かれたものでなく、全体的に浮きだたせるように描かれており、半肉彫式の要素もみられる。
- ②量産品のようなプロポーションを有せず、前後胴をつなぐ蝶番をもたず、フレームとなる帯板ももたない。小ぶりな引合板と押付板を地板に鋌留した異様な形態のものである。鋌も小さく、強度に優れる横矧板鋌留短甲らしからぬ製品で、外見は前期古墳に時折みられる、定型化する以前の短甲を思わせるものがある。
- ③虎姫町公民館所蔵のものを撮影。口縁部の一部と体部の一部が残存。体部の外面にはハケ目がみられ、内面に同心円状のタキはみられない。6世紀中頃のもののか。

〔参考文献〕

- ・『(仮) 虎御前山教育キャンプ場整備事業に伴う試掘調査報告書』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1998
- ・『北近江の遺跡』谷口義介・宮成良佐 1986
- ・『古代を考える—近江』水野正好ほか 1992
- ・『虎姫の昔話』虎姫町公民館 1979
- ・『田川沿革誌』滋賀県長浜土木事務所 1995